

令和2年度 幼児教育学科 専任非常勤教員合同会議 報告

日時：令和2年9月1日(火)午前10時～12時

会場：金城大学医療健康学部棟211教室

出席者：常勤15名 吉岡、太田、朝倉、石野、ウエスタハウト、上野、柴田、百海、
中村、三浦、水上、村上、森田、山田、米川

非常勤14名 小川、川辺、山田、山崎、米谷、黒崎、表、川岸、
上野幸、太田望、大久保、奥村、源代、小西、

テーマ：学科の学位プログラムレベルと科目レベルで学習成果の達成状況を評価し査定
(アセスメント)する

～遠隔授業を振り返り、学生の学びと今後の授業について考える～

内容：学科長挨拶に続き、各部からの報告として、特に実習担当から報告があった。2年の実習は、本来なら6・8・9月が実習期間であったが、9月に行っている。遠隔授業となりメールで指導することもあったが、なかなか力がかかず、不安の大きいところはある。また、実習園によっては、地区により実習を遠慮したいという声もある。実習中も訪問指導のほかにもメールなどを使い、学生の不安を取り除くとともに、実習園にもご理解いただき、教育・保育実習を支援したいと考えている。

テーマについての討議は、今回は、当初グループ討議を予定していたが、資料を読み込み、個人のワークシートを書くことで考えていくこととした。シラバスの到達目標(ホームページにあり)や、授業アンケートから、各自の遠隔授業の学習成果について振り返り、その後「田の字法」を使い検証した。

以下、各教員が記載したことを発表し、シェア、討議したものである。

【討議内容】

1. 遠隔授業の学習成果について

・1年は、遠隔でスタートしたため、学修の進め方に不安が大きかった。しかし、対面が始まってからは、1年は真摯に取り組む姿が見られた一方、2年は、緊張感のなさが感じられた。結果としては、成績については2年の方に底辺層が多くなっている。

・1年は、学力の差が出てきた。差をどうするかが課題である。

・数字だけではわからないが、従来ならば、学生の質問に対しすぐに答えられたことが、すぐに返答することができない。そのため、学生によって習熟具合の差が出てくる。対面授業では、授業でわからない子が質問すると、声を上げられない学生もわかる場合があるが、遠隔授業ではそのようなことがない。

・毎回ペーパーテストを行っている。内容は、保育士試験のレベルと同じにしている。

・いつもは小テストとレポートで評価しているが、小テスト、レポートが何回もできなかった分、一回のウエイトが大きくなった。今年は、授業中の意見や態度がなかったため、レポートや提出物での評価ウエイトが大きくなった。

・演習科目については、評価が難しかった。例年は、発表形式の評価も含めていたが、今年度は、発表、グループレッスンができなかったため、レッスン室で講師一人だけが聴いている状況で、緊張やプレッシャーを感じる事が少なく、成績が良くなる傾向が見られた。

・成績開示請求について、短大の学生はあまりないのではないか。中には、聞いてくる学生もいる。評価区分の割合や項目を説明すると納得するようだ。レポートの観点を聞いてくる

学生はいる。必須ワードがあることを伝えている。

- ・遠隔授業のシステムを整えて、評価していきたい。

2.遠隔授業の検証について(「田の字法」による)

①実施してみて良かった点

・遠隔授業では、授業内容を精選できた。学生にとっては、先に考えるので、自分で勉強しようという気になっていた。普段だと雑談ができるが、動画だと集中力が持つのは10分程度である。何を伝えるべきか、大事なことを考えることができた。著作権の関係で紹介できなかったものがあつたが、逆に自分で調べる学生がいた。

- ・解説入りのパワポ等、授業展開や方法について、改めて精選することができた。

・1年生は概して「まじめ」である。きちんと取り組む子が多かつた。勉強慣れしてる子と、していない子の差がある。例年になく、自分で取り組む学修時間が多い。1年は、家でやってくるのがあたりまえ、という状況がある。遊びに行けない、バイトができないということもあつたが、その分取り組むことができたのではないか。

②遠隔授業を実施してみて、困難点。

・学生からの課題提出のメールチェックがとても大変だつた。メール数が多く、返信を返すのに時間がかかつた。しかし、一言返すことで、次につながっていく。

・教員が返信と授業作成に追われてしまつた。夜中も、休みもなく、計画通りできない。内容よりも、取り組み方が大変だつた。

・手書きのレポートを写真に撮り、メール添付をした際の学生の課題が非常に見にくく、解読に苦労した。

・通信環境が整っていない。大半がスマホでの視聴となり、学修面で効率的ではない。月末には、通信制限がかかり、学修に支障が出た学生もいた。

・いきなり遠隔授業になり、学生同士の横のつながりができていないため、互いに聞きあうことができなかつたようだ。1年と2年の差が見られた。2年は、友達に聞いてなんとかかしていたが、逆に勝手な思い込みをする者もいた。

- ・アップロードの日と提出期限が教員によって違い、わかりにくかつたという声があつた。

③こうあればいいのになあ

- ・オンラインシステムの構築が必要。

・学生一人に一台のパソコンや、Wi-Fiの貸出等が望まれる。しかし、貸与の機器を本学所有にすると、機種が古くなることも考えていかなければならない。

・オンラインでは、グループワークをどうするか。Zoomのブレイクアウトルーム機能が使いやすいのではないか。自分たちの考えを出しながらできたり、個別に話ができたりする。教員が使えるようにすることも課題である。

・今回の遠隔授業の導入は急だつたので、学生、教員とも戸惑いが多かつた。今後は感染対策、導線確保しながら、学修の場を確保していくことが必要である。

④実現するために

- ・ソフトウェアを駆使できるように、教員・学生の研修をしていく。

- ・遠隔と対面のいいところを取り入れて行きたい。

- ・課題未提出者への対応や、途中途中でのフォロー体制をとる。

- ・感染症対策についても、学修に臨む態度に関しても、学生の意識改革が必要である。

- ・講義においても演習科目においても、学修の質の保証をしていきたい。